

日本社会福祉教育学会

Japanese Society for the study of Social
Welfare Education

NEWS LETTER No.45

事務局

〒998-8580 山形県酒田市飯森山 3-5-1

東北公益文科大学 小関研究室気付

TEL 0234-41-1288 〆 : info@jsswe.org <http://jsswe.org/>

2024年7月31日発行

目次(案)

1. 巻頭言 1
日本社会福祉教育学会 理事 西川 ハンナ
2. 日本社会福祉教育学会 会員向けアンケートご協力の御礼と集計結果のご報告 2
3. アポリア連載 6
アポリアとしての高等教育における社会福祉教育
日本社会福祉教育学会 会長 志水 幸
4. 「専門教育」とは「〇〇〇」である！ 8
「専門教育とは型の教授」 堀田 満生（音更町社会福祉協議会）
「専門教育とは「寄り添うこと」である！」 平塚 謙一（常磐大学）
5. 日本社会福祉教育学会 第20回大会のご案内 10
6. お知らせ 11
7. 編集後記 12

1. 巻頭言

足下を掘れ、そこに泉あり



日本社会福祉教育学会 理事 西川 ハンナ（創価大学）

グローバル化、ICT化は凄まじいスピードで進み、研究や教育においてもそれらの共有が推奨される。全方位で、「もっと合理的に、効率的に、世界を見る。それが価値あることだ」といわれているようだ。

表題はニーチェの言葉が由来である。福祉教育においても身近な地域で行わ

理事 西川ハンナ 会員

れている福祉活動を学ぶより先に、抽象度の高い汎用性のある知識や技術を伝えても学生の理解が追いついていないのではと思うことがある。教育機関の所在地においてその事例をもって社会福祉の理解や関心へとつなげる方法もあるはずだ。そのような社会福祉教育の、実践例の収集も必要ではないだろうか。

本学会の第20回年次大会(2024年9月7・8日)の開催校企画「SDGsに貢献する地域課題解決型の教育活動の取り組みと社会福祉教育～循環する地域参加と学び～」は創価大学文学部・経営学部・理工学部で地域活動を行う教員によるシンポジウムである。面白いのは、各シンポジストの研究テーマはその地域活動とは異なる。なぜそうなったのか。どのような教育効果を感じているのか。そこに福祉教育のヒントがあると考え。ぜひ多くの会員の参加を期待する。地域らしさといえば、学会2日目の9月8日はかつて桑都と呼ばれた八王子で、「第3回桑の日 ウェルフェス」を開催する(主催:創価大学桑の日実行委員会×創輝株式会社)。ウェルフェスとは「個人や地域社会の健康で良好な状態を意味する Well-being とフェスティバル Festival をかけ」名付けた。福祉を基盤に地域社会との接点を広げていきたい。



再びニーチェの言葉に戻る。『喜ばしき知恵』(村井則夫翻訳)では、以下のように翻訳されている。

尻込みせずに 君のいる場所を深く掘れ! 地下には泉があるからだ! 愚かな輩やからには言わせておこう/「地下にあるのは一地獄に決まっている!」と

萌芽的な地域実践や活動は「それは研究なのか」と失笑されることがある。しかし、地域活動の中には地域固有の風土・歴史から生まれたその地域による意思決定の方法や近隣と禍根を残さない工夫なども含まれている(西川 2023)。これらはソーシャルワークのグローバル定義の「地域・民族固有の知」である。福祉教育において地域活動にも注目していきたい。たとえ笑われても「言わせておけ、さあ尻込みせずに」というニーチェの言葉を胸に。

参考文献

西川ハンナ(2023)「書評 小森孝一『佐原の山車祭りとまちおこしの35年』～佐原の誇り『江戸優り』すべては佐原の賑わいのために～」週刊読書人 2023年5月26日
フリードリヒ・ニーチェ 村井則夫訳(2012)『喜ばしき知恵』河出文庫

2. 日本社会福祉教育学会 会員向けアンケートご協力の御礼と集計結果ご報告

今回のアンケートは、現在、会員の皆さまが「社会福祉教育のどのようなことに興味関心を持っているのか」を把握し、今後の学会運営(大会や研究集会など)に役立てるのみならず、会員の皆さまのご意見・ご批判などを参考にしながら学会の更なる発展に生かすことを目的に、2024年4月1日から5月7日まで、本学会会員の皆さまを対象に無記名にて実施させていただきました。ご多忙中、ご回答いただき誠にありがとうございました。おかげさまで、50名(回答率:20.3%)の方々にご協力いただくことができました。



全国より本学会に入会していただいていること、40～60代の会員の方が多く、若手研究者(20～30代)の会員が乏しいことがわかりました。

その他、実践現場よりも教員の会員数が大半であることが明らかとなりましたが、理論と実践の両輪で社会福祉教育の質的向上を目指す方向を向くことができているのではないかと思います。また、主な専門分野も多岐わたり、多くの視点を持ちながら社会福祉教育の発展に寄与できているのではないかと思います。

しかし、「職場の同僚などに本学会会員になることを勧めたいと思いますか」といった質問では、「勧めたい(22名(44%))」とほぼ同数で「判断できない18名(36%)」という回答が得られました。その理由は、「勧めたい気持ちはあるが、現時点では活発な活動をしているとは言い難いため」、「メリットが不明確」といったご意見でした。

これらのご意見をふまえ、本学会のニュースレターでも、皆さまにお届けする話題を検討していきたいと思えます。

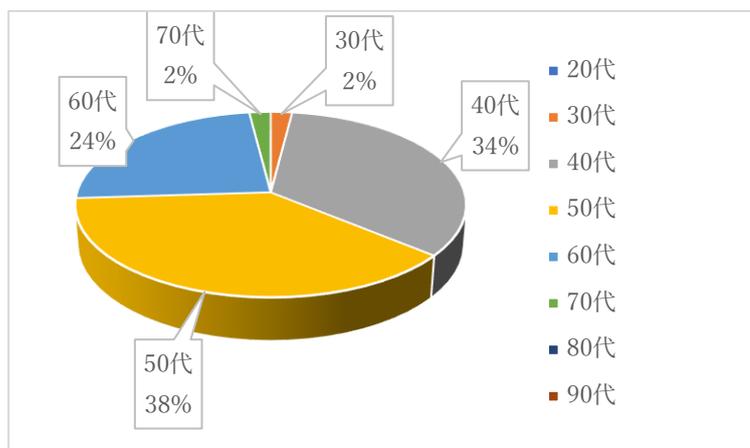
今後も、皆さまのご意見をお伺いしながら学会運営の質的向上を進めてまいりますので、お力をお貸しいただければ幸いです。

何卒、よろしくお願いいたします。

会員向けアンケート（日本社会福祉教育学会）
【集計結果】

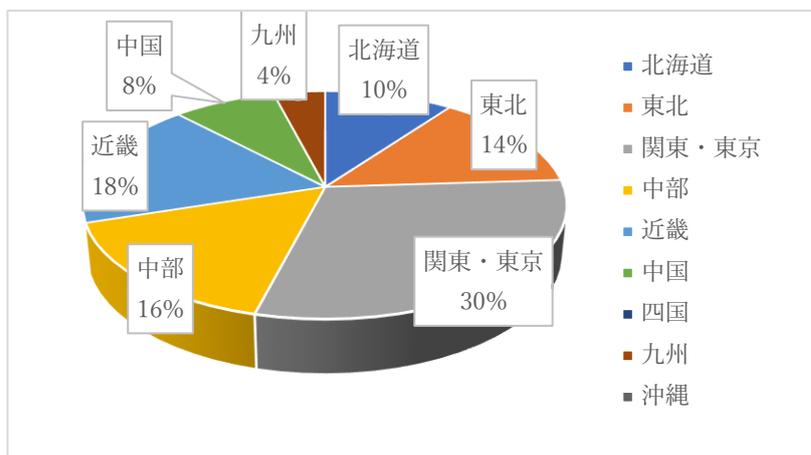
1.あなたの年代を教えてください。

	回答数 (n)	割合 (%)
20代	0	
30代	1	2
40代	17	34
50代	19	38
60代	12	24
70代	1	2
80代	0	0
90代	0	0
回答したくない	0	0
計	50	100



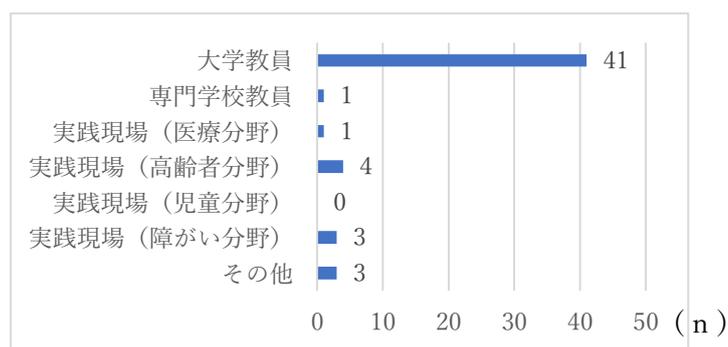
2.あなたのご所属先の地域を教えてください。

	回答数 (n)	割合 (%)
北海道	5	10
東北	7	14
関東・東京	15	30
中部	8	16
近畿	9	18
中国	4	8
四国	0	0
九州	2	4
沖縄	0	0
計	50	100



3.あなたの職種を教えてください（複数回答可）。なお、「その他」を選択された方は、どのような分野（地域福祉、司法福祉など）であるのかご記載いただけますか。

	回答数(n)
大学教員	41
専門学校教員	1
実践現場（医療分野）	1
実践現場（高齢者分野）	4
実践現場（児童分野）	0
実践現場（障がい分野）	3
その他	3



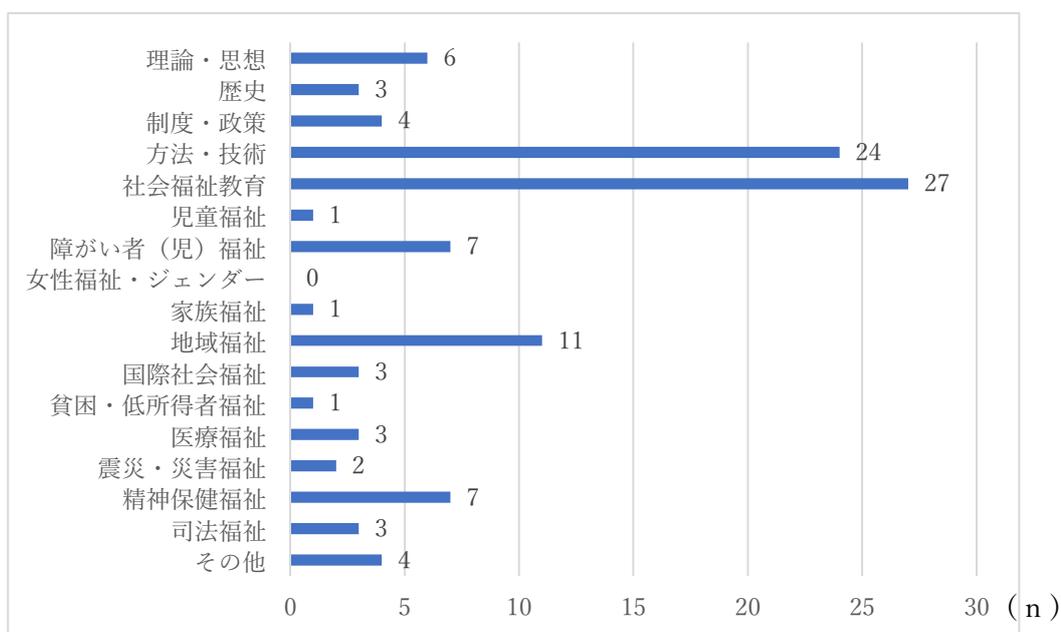
その他

実践現場（地域福祉）、社会福祉関係研究所、高等学校教員

4. あなたの主な専門分野を教えてください（複数回答可）。

	回答数(n)		回答数(n)
理論・思想	6	地域福祉	11
歴史	3	国際社会福祉	3
制度・政策	4	貧困・低所得者福祉	1
方法・技術	24	医療福祉	3
社会福祉教育	27	震災・災害福祉	2
児童福祉	1	精神保健福祉	7
障がい者（児）福祉	7	司法福祉	3
女性福祉・ジェンダー	0	その他	4
家族福祉	1		

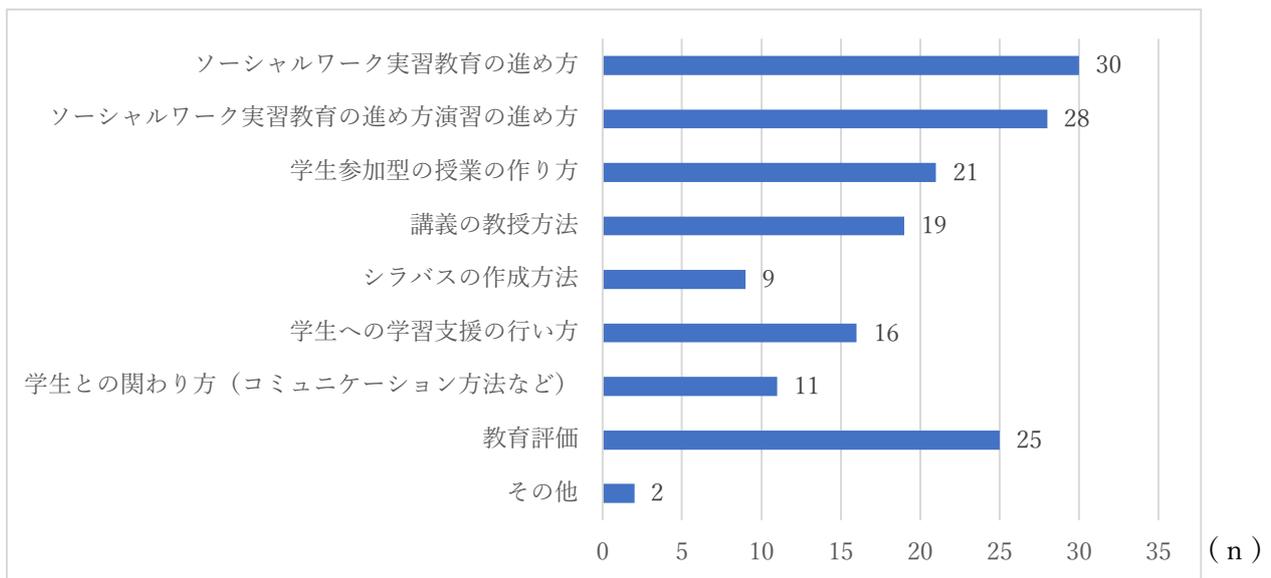
その他：LGBTQ、高齢者、介護福祉、特になし



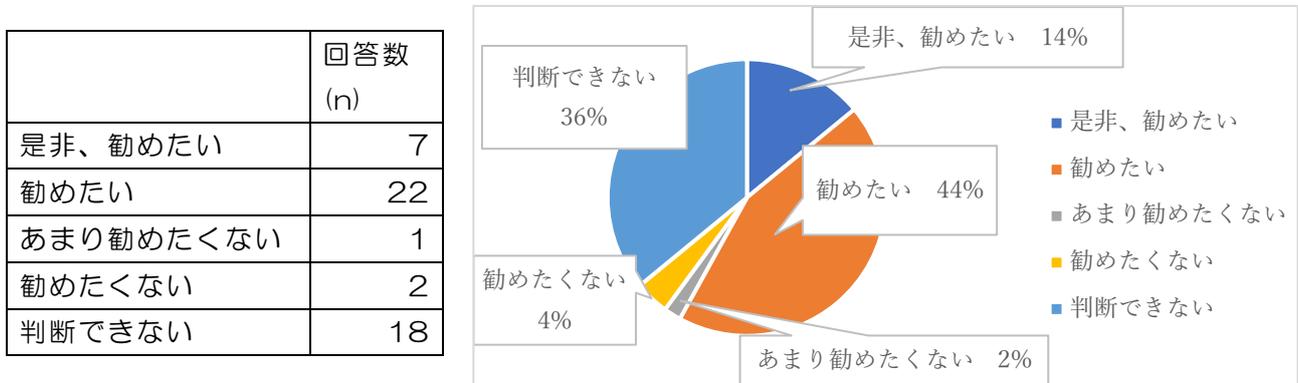
5. 本学会の大会や研究集会、ニュースレターに取り上げてほしい話題を教えてください（複数回答可）。

	回答数(n)
ソーシャルワーク実習教育の進め方	30
ソーシャルワーク実習教育の進め方演習の進め方	28
学生参加型の授業の作り方	21
講義の教授方法	19
シラバスの作成方法	9
学生への学習支援の行い方	16
学生との関わり方（コミュニケーション方法など）	11
教育評価	25
その他	2

その他
卒業教育、特になし



6. 職場の同僚などに本学会会員になることを勧めたいと思いますか。



7. 上記6にて選択した理由を教えてください。

◆「是非、勧めたい」「勧めたい」を選択した方の理由◆

最近参加できていませんが、教育に熱心に取り組もうとされている学会であること。

医療系の専門職では、それぞれの専門職に特化した教育学会があり、研究者は自らの専門分野とは別に教育系の学会にも所属していることが一般的である。

教授法について情報交換の活性化のため

学会にふさわしい研究、取り組みをされているが、入会されていないため。

社会福祉教育は、専門職養成校に携わる全ての教職員にとって重要な関心事であると考えためです。

ソーシャルワーク教育の質を高めるため

社会福祉教育に携わる者として、社会福祉教育について専門的に学ぶ機会が重要であると考えため。

社会福祉教育を研究テーマとした教員も在籍するため

実際行っている教員や関係者の声を反映して改善につなげるためにも多くの会員が必要だと思つので

実習や演習について学べることがあると感じるため
情報共有ができるので
社会福祉教育に関する情報を得る機会となるため
同じ領域で仕事をしている中には、共通認識を持ち業務、教育を行っていく必要がある。そういう意味では、共通認識構築のために活用できる場であると考えられるため。
社会福祉教育の方法論を学んでほしいから。
全員が専門職養成などの社会福祉教育に携わっている職場であるため
ソーシャルワーク演習・実習教育の教授法について悩んでいる先生方もおられるため。
教員としての教育に役立つから
社会福祉教育に特化して教育方法や教育内容について語り・学べる唯一といってよい学会だから。
社会福祉現場における人材育成を進める上で、大切なテーマを扱う学会なので勧めたい。しかし学会の大会などの企画に参加したいですが、遠方かつ実習巡回と重なり参加できない事が多いので、多様な参加方法を検討して頂きたいと思います。

◆「あまり勧めたくない」「勧めたくない」を選択した方の理由◆

学会としての情報提供が少ない。
学会運営機能の基盤が弱いのではないかとと思うところ

◆「判断できない」を選択した方の理由◆

学会の知名度がそれほど高くなく、他者に勧めても反応が薄いから。
勧めたい気持ちはあるが、現時点では活発な活動をしているとは言い難いため。
このアンケートを踏まえ、活発な活動に結び付くのであれば、自信を持って勧めたい。
実践現場の為、本学会に興味関心のある職場の同僚がいない
入会後の学会活動を踏まえての回答
活躍の分野、職場によって人それぞれであるため。
その方にとってどのような意味があるかはわからないから。
実習指導に関わるものが他にいないため
最近、自身が学会活動ができていないため
福祉教育の指導に直接関わる人が少ないため。年会費の負担が伴うため。
メリットが不明確
学会入会にはそれぞれの意思で決められるものなので
現在は教職を離れて現場にいるため
各先生方の考え方の個性が大きいから

3. アポリア連載

本企画は、ニュースレター初の試みです！

会員の皆さまが、本学会の研究対象は「高等教育における社会福祉専門教育」という認識のもと、さまざまな高等教育機関から社会福祉教育のあり方を考えるきっかけとなれば、という思いより本連載を始めました。

各々の機関の現状、今後どのように変化していく必要があるのかを考える機会となれば幸いです。



第1回目は、本学会会長である志水幸先生会員（北海道医療大学）にご執筆いただきました。お忙しい中、誠にありがとうございました。

アポリアとしての高等教育における社会福祉教育

日本社会福祉教育学会会長 志水 幸（北海道医療大学）

アポリア連載企画の第一回として編集者から与えられたテーマは、「高等教育を考える」というものであった。浅学菲才の者には荷の重い課題であるため、パッチワーク的に先学のお力を援用した二次的創造的に試論を展開する。

翻って、アポリアとは、アリストテレスの第一哲学である『形而上学』では、問いに対する相反する二つの対立する答え、すなわち難問、隘路と蹉跌のことである。敢えて、私に与えられたテーマである“高等教育における社会福祉”の観点から言えば、高等教育機関とは、研究機関か教育機関か、その目的は市民育成か専門職養成かに纏わる葛藤ということになる。

さて、現在も、本学会のホームページに掲載されている会長就任時のNLⁱⁱにおけるご挨拶では、R.ティトマスの著作ⁱⁱⁱに触れ、その中で彼が援用したA.N.ホワイト・ヘッドの箴言^{iv}を自戒を込めて引用した。特筆すべき点は、ホワイトヘッドのこの箴言は、アメリカにおける全米ビジネス・スクール協会の創立記念講演として行われたものであるということである。大学がビジネスに関わる事柄を教育・研究・訓練の場に取り入れることについて、中世以来の大学教育史を振り返りつつ述べた祝辞であり激励であった。

ここで、高等教育の中核である大学が大学であることの意義に係る歴史的な文書を一瞥したい。

「大学は現代のあらゆる教育組織の首位に立つものである。自由な社会においては、大学は同等の関係にある三つの機能を果たす。第一に、知的自由の伝統を価格では測りえない宝として擁護し、思想の自由を刺激し、探究の方法を完成し、知識の向上を推進し、科学と学問を培い、真理を愛する心を養い、社会に不断の啓蒙の源泉として奉仕する。第二に、大学は、才能ある若い男女を、あらゆる年代、あらゆる民族の最善の思想、最高の精神的刺激に触れさせることによって、彼らとその家族生活および社会生活の改善、産業や政治のより能率的、人道的な行動、さらには国家間の理解と善意の促進のための、指導的地位を占めるように育てる。第三に、大学は、常に変化し、また不断に出現する社会の要請につねに敏感でありつつ、選ばれた若い男女を、新しい職業についても昔からの職業についても、その技術に熟達するよう訓練する。」^v

この文章は、GHQ 総司令官マッカーサーの要請に応じてアメリカ政府が派遣した合衆国対日教育使節団が作成した報告書の一節で、「高等教育」の章の冒頭に置かれているものである。なお、第三の指摘である専門職教育の重要性は、日本社会事業学校、さらには日本社会事業大学の設置の淵源でもある。

我が国の高等教育研究の第一人者である寺崎昌男は、同報告を「体系的な近代大学像を、フランスよく語ったまれに見る大学論」^{vi}であると評価し、「大学」を「大学教員」に置き換えて読むことを提唱されている。それにより、高等教育機関の本来の使命である、自由によって支えられた研究、人間形成と教養教育、専門職教育の三つの機能に対して同等の関心を持つことを喚起しているのである。先に指摘したホワイトヘッドの箴言について寺崎は、「この点こそ実務教育や資格獲得だけをめざす学校と大学とを区別する指標なのではあるまいか」と指摘している。

寺崎は、この点を敷衍して「問題は資格のための教育・学習の形態と内容が、イマジネーションを介して行われるかどうかである。さらに、知識の真の伝達は、短なる詰め込みや教え込みによって成功するのではなく、学習者の参加を通じたアクティブな学習によって初めて成功する。さらにホワイトヘッドによれば、教員自身もまた、想像力を持ち続けつつ自分の経験と研究とをつなぐことを求められる。現在日本の大学にひときわ強く求められている『創造的研究』とは、まさにそういう基盤の上に花開くものであろう」^{vii}と指摘している。

擱筆に当たり、斯界の先学の箴言を援用する。吉田久一は遺言的著作の中で、社会福祉理論の反省として6項目を指摘しているが、その最後に「社会福祉理念の支えである社会福祉教育の独立性が乏しい。カリキュラムの編成も理論的基礎を欠いて、時流に流され勝ちで、特に教

育と行政の混濁化があった。」^{viii}と指摘している。後継の我々は、この警鐘について、痛みを伴って認識しなければならない。

-
- i 外山滋比古（1975）エディターシップ，みすず書房，を参照されたい。
 - ii 志水幸（2014）：巻頭言 社会福祉教育研究の射程と本学会の意義，日本社会福祉教育学会 NEWS LETTER No.23. P.1-2.
 - iii R.M,ティトマス、三浦文夫監訳（=1971）社会福祉と社会保障-新しい福祉を目指して、東京大学出版会， P.29.
 - iv ホワイトヘッド、森口兼二 他訳（=1986）ホワイトヘッド著作集 第9巻 教育の目的、松籟社， P.132.
 - v 村井実訳（=1979）アメリカ教育使節団報告書，講談社学術文庫， P106.
 - vi 寺崎昌男（2010）大学自らの総合力-理念としてのFDそしてSD，東信堂， P.7.
 - vii 同上 P.15
 - viii 吉田久一（1995）日本社会福祉理論史，勁草書房， P.215.

4. 専門教育とは、「●●●」である！

本企画も「アポリア連載」に続き、ニュースレター初の試みです！実践者・研究者、各々の立場で「専門教育」について考えるきっかけとなれば…という思いより、スタートしました。

若手研究の方や現場実践の方を中心に、その人自身が考える「専門教育」とは何であるのかを「○○○」という一言で表現してもらい、その理由（何を以て専門教育としているのかなど）などを教えていただく内容です。

初回は、堀田満生会員（音更町社会福祉協議会）、平塚謙一会員（常磐大学人間科学部）のお二方に熱い思いをご執筆いただきました！

お忙しい中、誠にありがとうございました。



「専門教育とは型の教授」

堀田 満生（音更町社会福祉協議会）

実践者として「専門教育」を述べるにあたっては、学生時代、或いは就職後に職場で教育を受けてきた立場と、現場の者として後輩指導や実習受入れをとおして実習生に指導をしてきた立場の2点が考えられるが、まずは前者の立場から私見を述べる。

私が学部学生時代に指導教員から受けた指導のなかで鮮烈に記憶に留まっている言葉がある。それは、「ベテランのソーシャルワーカーでも新米のソーシャルワーカーであってもクライアントに最善の利益を与えなければならない」というものである。

新人のソーシャルワーカーとして入職してから中堅となった現在まで、支援関係が終結した際に、この言葉が頭をよぎる。

職業としての専門性は、職業倫理性、専門的知識、専門的技術であり、専門的知識および技術を支えるものとして、基本的関連知識があると承知している。

知識と技術を二分して述べることには若干の違和感もあるが、学部卒業時点において、職業倫理、専門的知識、そして基本的関連知識は備わっていると仮定しても、それを実践（パフォーマンス）する専門的技術が備わっているか、また、単に実践するのではなく、「クライアントに最善の利益を与える」ことが要件となると更にハードルは高くなる。

では何を基準に、新米のソーシャルワーカーは実践するのか。私の場合は大学で教わった「型」であったと思う。教わった「型」に目の前の事象をはめていくことで、最善の利益になるよう実践していく。そこに、その分野・職場の方法を追加していくといった過程であったと振り返る。

次に、後者の立場としては、実習生や後輩指導においてもやはり、その人が持っている「型」を探ることからはじめることになる。現場で起きる目の前の事象の「見方」や「分類」の仕方、別の言い方をすれば、どのようなフィルターを通しているのかを確認することで、養成校でどのような教育を受けてきたのかをある程度認識することができると感じている。

数年前に他学部からの編入生の実習指導を受け持った時、すなわち、本来習得しておくべき知識を習得せずに実習を迎えた学生への指導を経験したことで、専門教育としての「型」を更に意識するようになった。つまり、その学生は「型なし」の状態であったということである。

資格制度は専門性の担保という側面を持つが、それが型を修得することとイコールの関係にあるとは言い切れない。資格の取得を目指した学習は科目毎の知識の詰め込みであり、その知識をソーシャルワークという本流に統合していくような関与を専門教育として意識しなければならないと感じる。

伝統芸能等「わざ」の世界において「型」の修得プロセスは「守・破・離」という段階があるが、専門教育は「守」の段階を修得するものであると考えている。

専門教育を受けた養成校出身の新米のソーシャルワーカーは専門職としては完成されていなくても、「守」の段階の「型」を有することで専門教育を受けてこなかった者と比して入職後の熟達への速度は優位であるとも感じている。

以上、実践者として「専門教育」について述べてきたが、随所に説明不足があり、極めて抽象的な表現となってしまったことをお詫びする。



「専門教育とは「寄り添うこと」である！」

平塚 謙一（常磐大学）

この度新しい企画へ寄稿させていただく機会をいただき、専門教育に関して改めて振り返る機会ともなりまして感謝申し上げます。ここで専門教育とは何かということ私の立場から申し述べるのは恐縮ではありますが、これまでの専門教育の経験のなかで感じたことを述べさせていただきますと思います。

私は国家試験関連の財団法人での勤務などを経て茨城県の二つの大学でソーシャルワーク専門職教育に携わってきましたが、大学に着任したばかりの頃は、専門教育・指導が高度に体系化された環境に、私自身適応するのに苦労しました。教員としての役割を果たすために社会福祉制度やソーシャルワーク技術等に関する知識のアップデートすることはもちろん、学生一人ひとりに対して提出物へのコメントや対面での面談を繰り返し実施する非常に手厚い指導の体制でした。そうしたなかで学生たちは朝から夜遅くまで実習計画書の準備や実習報告書の作成（振り返り）、実習報告会の準備、演習課題等に取り組み、その努力を通じて着実に力をつけていくのです。実習に向けて取り組むなかでソーシャルワークの専門性について鍛錬を重ね、また社会人としての言動やマナーなどについても試行をとおして身に付けていきます。1年生から2年生、2年生から3年生へと飛躍的に成長していく様子にとっても驚いたことを覚えています。

そうしたソーシャルワーク専門教育では、一人ひとりの学生に寄り添い、どのような思い込みやこだわり、捉え方の偏り、知識の不足が理解や成長を妨げているのかを理解し、指導に対して受け入れがどの程度あるかも踏まえ、それぞれの状況にあった指導や対応を行います。そのためには授業や面談、日常の関わりをとおして、学生それぞれの個性や考え方、目指す将来の方向性等を理解するように意識します。また実習において（将来就職してからも一層関わりますが）、学生自身がそれでよいと思ってもそこに課題がある可能性もあり、専門性を高めるためには自身が自立的にスーパービジョンを求めることが大切です。例えば、利用者に対する支援や声掛けなどの関わり、またその中で感じた感情をスーパーバイザーに伝える自己開示を行うことで、適切な助言を得ていくことができるようになることは大切です。また現場における関係性の構築にも関わります。学生や若いワーカーの人たちが自己開示を行うことができ

るように促すこと、自己開示をしやすい環境をつくりだすこともスーパーバイザーが行い得ることかと思えます。またソーシャルワークは感情的に負担がかかる仕事であり、バーンアウトを防ぐことにもスーパービジョンは関わります。これまで日本ではソーシャルワーカーの出身校の教員が（管理的機能はもたないものの）スーパーバイザーとなっているケースが多いことが指摘されてきましたが、若いワーカーを支える仕組みとしてそれも意義のあるものではないかと考えます。

学生が卒業後に福祉の専門職として就職することによって、卒業後も福祉に関する様々な機会や教員との関わりが継続していくということも、ソーシャルワーク専門教育の一つの側面であると思えます。このことも教員に対して一層専門教育への意欲を高めさせることであると思えます。ソーシャルワーカーとして働く卒業生と教員・養成校との関係性のなかで、学生は卒業生からお話を伺ったり、現場でボランティアやアルバイトをする機会などを得ます。実際に働いている先輩の体験をお聞きしたり、現場での経験をすることで、学生は自身の将来像を具体的に描き、将来に向けた道筋を見出すことに繋がります。

今回キーワードに「寄り添うこと」をあげさせていただきましたが、それは教員から学生に対してもそうなのですが、それを教員が身をもって示すことをとおして、学生が将来の支援者として利用者に対してそのような関わりをしてもらいたいという意図も含めて選ばせていただきました。

5. 日本社会福祉教育学会 第20回大会のご案内

◆開催趣旨

大会テーマ

SDGs に貢献する地域課題解決型の教育活動の取り組みと社会福祉教育
～循環する地域参加と学び～

2024年
9月7・8日

1日目
八王子市学園都市センター
(JR八王子駅北口正面イベントホール)

2日目
創価大学・中央教育棟

事前申込×切
8月25日

地球沸騰化や日本少子高齢化、格差社会等による社会課題はより身近になっている。大学では地域貢献が第三の使命といわれる。法学部での夜回り、経営学部での子ども食堂の運営。今、社会福祉以外の学部やゼミで社会課題に取り組む活動が増えている。また、2022年から、高校では本格的に探究学習がスタートした。探求学習では自分なりに問いを立て、情報を集めて分析して、まとめ発表する一連の流れを行われてくる中で、これらを受けて社会課題を取り扱い、考えアクションに結び付ける流れをうけて高等教育機関ではこれらをさらに展開するような活動の提供はないのだろうか。

活動を通して課題の発見では社会福祉学部ではこれらは無関係なのだろうか。本学で地域課題に取り組むゼミ・教員の活動をもとに、社会福祉学以外の領域での地域課題への取り組みそしてその教育に対する考えなどから地域課題の解決、地域参加への在り方を検討する。これらは、グローバル定義においても『ソーシャルワークの理論、社会科学、人文学、および地域・民族固有の知を基盤として・・・諸科学の』とあるように別領域の知識・技術をもって地域課題の解決に取り組む広域の知識を取り込む方策への一助となると考える。



詳細はコチラ！！

<https://www.jsswe.org/meetings/post-2214.html>

◆スケジュール

以下の大会プログラムは予定であり、場合によっては変更の可能性があります。最新情報は、お手数ですが上記 QR コードから学会ホームページをご覧ください。

大会 1 日目（9 月 7 日） 八王子市学園都市センター

13:00～13:15	開会式	
13:15～14:45	基調講演	
14:45～15:00	休憩	
15:00～16:40	開催校企画シンポジウム	
17:00～17:30	休憩・移動	
17:30～19:30	情報交換会	

大会 2 日目（9 月 8 日） 創価大学

10:00～12:30	学会企画シンポジウム	
12:30～12:40	休憩	
12:40～13:15	総会	
13:15～14:00	昼食休憩	
14:00～14:25	新カリ 2 か所実習に関する情報交換	
14:25～15:25	自由研究報告	
15:25～15:30	閉会	

多くの方々のご参加をお待ちしております！！

6. お知らせ

コンテンツ募集中！！

イベント開催情報、便利で役に立つ教育ツールや教材、教育実践 tips(コツや秘訣)、お勧め動画やウェブサイトなどのコンテンツも、随時受け付けています。

皆さま、とっておきの情報を事務局 (nl.jsswe@gmail.com) までどしどしお寄せください。

新年度を迎え、ご所属先やご連絡先（メール等）等、変更された会員の皆さまは、お手数ですが事務局（nl.jsswe@gmail.com）までご連絡いただけますようお願い申し上げます。



7. 編集後記

ニュースレター45号をお届けいたします。

気付けば梅雨が明け、本格的な夏の到来ですね。皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

会員の皆さまにおかれましては、何かと気の張る4月が過ぎ、GWで一息つき体調を整え、「さあこれから！」と走り続けている最中とお察しします。

本号より、「アポリア連載」「専門教育とは、〇〇〇である！」がスタートしました。

本学会の研究対象は、「高等教育における社会福祉専門教育」という認識です。「アポリア連載」「専門教育とは、〇〇〇である！」を通じ、会員の皆さまにとって、社会福祉教育のあり方や「専門教育」を考えるきっかけとなれば幸いです。是非、お目通しください！

今号も、多くの会員の皆さまにご協力をいただきながら作成し、発行を迎えることができました。誠にありがとうございました。

次回は、11月末を予定しております。お楽しみに！



（ニュースレター編集委員 島谷綾郁）